アシナガバチ類

人家周辺に多いフタモンアシナガバチ，キアシナガバチ，セグロアシナガバチなどは，洗濯物や靴などに潜入して被害の原因になることが多い種です。

フタモンアシナガバチ　14～18mm
人家付近に最も普通に見られる

生態

越冬した女王バチは3月から5月に巣造りをはじめます。5月から8月ごろに働きバチが出現して，幼虫の餌やりなどをおこない，8月末には巣の大きさが最大となります。また，7月から9月に新女王バチや雄バチが誕生します。

新女王バチは10月から11月にかけて家屋内外のさまざまな隙間に潜り込んで越冬します。

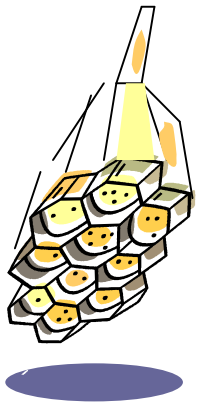
（一般に，巣のあった場所から数メートル以内で越冬するといわれています。）

セグロアシナガバチ　21～26mm
人家付近に普通，攻撃性はやや強い

営巣場所

家屋の軒下や周辺の隙間，植え込み，生け垣，戸袋，ベランダなど

害虫を狩る天敵として役立っています。
加害の危険性がなければ，
むやみに駆除しないでおきましょう。



巣はお椀を逆さにした形です

予防

- ハチをおどかしたり，巣をいたずらしないことが基本です。
- 洗濯物や布団をとりこむときには，ハチがいないか確認しましょう。
- 草刈り，庭木の剪定などをおこなう場合は，巣がないことを確認しましょう。

被害

攻撃性はスズメバチほどではありませんが巣に触れたり，壊したりすると刺されます。毒針から分泌される数種の毒物質が，傷みや腫れなどの原因になります。

また，ハチ毒に対するアレルギー性のショックはスズメバチの場合と同じで，重症例や死に至るケースも珍しくありません。

刺された後に，血圧低下，頭痛，じんましんなどの全身症状がある場合には，一刻も早く医師の治療を受ける必要があります。

ハチ毒に対して過敏反応を示す恐れのある人は，事前に家族，友人，職場の同僚などの身近な人々に，緊急時の対応法や医療機関を含めた連絡網を伝えて，協力をお願いしておくことも必要でしょう。

★ 刺された時の処置については，「スズメバチ類」を参考にしてください ★

＜参考文献＞

1．梅谷献二 著 ： 野外の毒虫と不快な害虫 (1993)

2．水谷澄 著 ： ハチによる刺症事故防止に関する研究 (1997)

3．加納六郎 著 ：節足動物と皮膚疾患 (1999)

ミツバチ類

ミツバチ類											発生時期
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

ニホンミツバチ（働きバチ）

体長 ： 約13mm

日本には，在来種のニホンミツバチと明治期に養蜂（ようほう）のために輸入されたセイヨウミツバチの 2 種が生息しています。

生態

一匹の女王バチを中心にして，数千から数万匹の働きバチ，繁殖期には数千匹のオスバチで群が構成されています。

3 月から 4 月に働きバチは越冬から目覚め，蜜や花粉集めなどの活動をはじめます。

巣の中には新しい王台がつくられ，新女王バチが誕生します。新女王バチが羽化する直前の晴天の日に，旧女王バチは群の約半数の働きバチとともに，新しい営巣場所を求めて飛び去ります。（分蜂・ぶんぽう）

女王バチは交尾をして卵を産み続け，働きバチは巣造りや清掃，蜜集めなどをおこないます。女王バチの寿命は 4 年から 5 年くらい，働きバチの寿命は春から夏では1ヶ月から 2 ヶ月，冬は 6 ヶ月です。

営巣場所

樹洞，岩の間，屋根裏，床下，戸袋の内側など

被害・予防

一般に攻撃性は弱く毒量も少ないのですが，分封時や外敵に襲われた群が逃げるとき

に空中を飛び，恐怖感を与えることがあります。

刺傷事故は，分蜂時に発生することが多いです。刺激を与えない限り，人を刺すことはありませんので，そっと見守りましょう。（引越し場所が見つかると，全部のハチは飛び去っていきます。）

ミツバチに刺されたら…

ミツバチの毒針は，人を刺すと抜けない構造になっています。また，毒の入った袋も一緒についているため，刺されたら毒針を全て抜き取りましょう。

フェロモン

人を刺すと，フェロモンという物質を出して，無数の働きバチが集まって攻撃をしてきますので注意してください。

ハチ毒に対して過敏反応を示す恐れのある人は，事前に家族，友人，職場の同僚などの身近な人々に，緊急時の対応法や医療機関を含めた連絡網を伝えて，協力をお願いしておくことも必要でしょう。

刺傷による直接被害は軽症に終わることがほとんどですが，ハチ毒に対するアレルギー性のショックはスズメバチの場合と同じです。刺された後に，血圧低下，頭痛，じんましんなどの全身症状がある場合には，一刻も早く医師の治療を受けましょう。

★ 刺された時の詳しい処置については，「スズメバチ類」を参考にしてください ★

＜参考文献＞

1．梅谷献二 著 ： 野外の毒虫と不快な害虫 （1993）

2．水谷澄 著 ： ハチによる刺症事故防止に関する研究 （1997）

3．加納六郎 著 ： 節足動物と皮膚疾患 （1999）